

インターネット俳誌／SEIGETU

清 月

5月中の出句 19名 延べ665句



第166号 平成26年 5月

俳句の仮名遣い・旧仮名遣いについて

俳句を作る上で厄介なのが旧仮名遣いと言う人が沢山いらっしゃいます。

ゆたか

伝統俳句グループでは一〇〇%旧仮名遣いが用いられ、現代俳句では九〇%くらいのグループで旧仮名遣いが用いられています。

私も、学校教育で最後に旧仮名遣いと接したのは、昭和三一年、高校の化学の授業での片仮名・旧仮名遣いの板書でした。その後、俳句を始めて、独学で旧仮名遣いの文法や送り仮名の知識を深めてきた次第です。

俳句社会では、一時、新仮名遣いによる自由律俳句が台頭したことがありましたが、その後下火となり、現在では、古くから詠み継がれてきた旧仮名遣いによる定形俳句が主流となっています。

清月における出句でも、時に、口語表記が見かけられ、これらの多くは選外としています。が、句材の捉え方などが優れているものは、旧仮名遣いに添削して選に入れていきます。

作句の際、旧仮名遣いで疑問の残る言葉については、歳時記や国語辞書で確認していただきたいものです。

【最近、気になった表記】

あじさみ・あぢさい↓あぢさみ 想い↓想ひ 賑わい↓賑はひ 惜しむ↓惜む

買う↓買ふ 植え↓植ゑ なめくじら↓なめくぢら 終え↓終へ 舞い↓舞ひ

食う↓食ふ 向こう↓向かふ 洗う↓洗ふ 負い↓追ひ 代わり↓代り つ↓つ

目次

近詠	雑詠選	寸感	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選	十句選
ゆたか	ゆたか	ゆたか	恵山	幹夫	よし子	宏一	美琴	允孝	山溪	省司	伸義	しゅじ	順一	睦夫					
2	3	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20					

近詠

野田ゆたか

雨やんで茅花流しの夜となりぬ

新樹燃え水琴窟の音かすか

亀鳴くや謎がなぞ生む写楽の絵

何気がねとてなき余生更衣

新緑の日の斑の揺ゐる御幸道

雑詠

(太字は秀句)

ゆたか選

うららかや子供の手品種みえて 岐阜 石崎そうびん
 麦秋やモザイク柄の美濃平野 同
 勤行の読経朗々藤の花 同
 卯波分け一直線に舂かな 同
 夏来る切子の杯に吟醸酒 同
 旧道の軒並み低く菖蒲茸く 千葉 清水恵山
 桑断ちや上蔭の時期来るらし 同
 渡月橋囃の舟や西祭 同
 見てくれと海酸漿を鳴らしけり 同
 米櫃の底に穀象逃げ切れず 同

山川草木雨の八十八夜かな 岡山 橋本幹夫
 上蔭の生業競ふ家二軒／ 同
 やはらかに君眠る夜の椎落葉 同
 島唄の調べ哀しき烏賊炙る 同
 小隊長藜の杖で地点指示 同
 どの道も今を盛りの花水木 吹田 池下よし子
 颯爽と紺のスーツや若葉光 同
 受付の泰山木の花大し 同
 姉二人長子けなげや葱坊主 同
 主菓子の銘はおもかげ水羊羹 同
 青嵐大樹を揺らし雲までも 大阪 木村宏一
 卯の花やこぼれて白し月の夜 同
 学生の足音軽し樟若葉 同

黒百合や口遊ぶ歌あり甲山 大阪 木村宏一
 神苑はすだれすだれの藤の花 同
農道を車疾走麦の秋 三重 山口美琴
 子供の日親子サッカー交流す 同
 夏立つや乙女の足の長きこと 同
 参道に試飲呼び込む新茶かな 同
 クイーンの誉れと気品競ふ薔薇 同
 くす玉を割って進水夏来る 千葉 田村公平
 新緑の街から街へ跨線橋 同
 バーベキュー囲む野球子子供の日 同
 グランドは教室代はり風薫る 同
 夏めいて塗りかへてゐる海の家 三重 後藤允孝
 時鳥鳴ひて深山欲しいまま 同

千年を手繰り寄せたり樟若葉 三重 後藤允孝
 時時に息を継ぎ足し田草取 同
 夏木立奥の院へと磴いくつ 愛知 足立山溪
 菊石の出づる山裾袋掛 同
 初夏や電子辞書より鳥の声 同
 夏野菜あれやこれやと狭き庭 千葉 筒井省司
 ひとしきり舞って隣家へ揚羽蝶 同
 雨のあとつやつやの肌柿若葉 同
 空青し舞ひ立ちさうな山法師 静岡 渡邊春生
 宿坊の廊下広々若葉寒 同
 万緑の空あをあとと鯉跳ねる 同
 一山の石南花浄土明りかな 大阪 山縣伸義
 賑はへる友の個展や街薄暑 同

わが暮しいよよ簡素に更衣 大阪山縣伸義
 観音の御手にふるるや花水木 島根白根鈴音
 草中に拳かかげて夏蕨 同
 庭下駄の泥の乾きや別れ霜 同
 里山に夏鶯の声通る 大阪森戸しゆじ
 青葉から青葉に伝ふ風のあり 同
 レール錆び矢車菊は隆盛す 愛知石川順一
 名の知らぬ鳥にゆすらの実を盗られ 同
 母の日や宅急便の待たれをり 山梨志村万香
 立葵明石の海に顔向けて 同
 女子会のトーク弾けるソーダ水 鳥取瀬尾睦夫
 放水のシユプール描く五月晴 同
 全山の重みを見せて樟若葉 愛知駒田暉風

寸感

ゆたか

うららかや子供の手品種みえて そうびん
 子供が見せてくれる手品。習いたてで上
 手に種を隠せなかつたのも微笑ましい。
 おだやか日を浴びての手品の景。子供さ
 んと作者のよい関係が伝わってきます。
 季節がよく効いている。
 旧道の軒並み低く菖蒲葺く 恵山
 生活環境の変化により市街地では軒のあ
 る家屋がなくなり、軒菖蒲を見かけること
 も少なくなつた。
 旧道で見かけた軒菖蒲に感動をした作者。
 古き良き時代の端午の景が懐かしく伝わ
 ってくる。
 山川草木雨の八十八夜かな 幹夫
 山や木、草や木など総てのものに自然の
 恵みをもたらす雨。
 農家で八十八夜と言えば、種蒔き・茶摘
 ・養蚕などで忙しくなり始める時季。
 雨が明るく慶事のように伝わってくる。

どの道も今を盛りの花水木 よし子
 水木の花や葉は、人の目に優しく公園や
 街路樹によく用いられる。
 縦横に繋がる道が、水木の花の明りで照
 らされている町並みが見えてくる。
 明るい町並みの景がいい。
 青嵐大樹を揺らし雲までも 宏一
 青葉のころのやや強い風を受けている大
 樹。
 樹を見上げてみると、止まっているはず
 の雲が流れているように見え、揺れている
 ようにも見えるという。
 雲の見え方を捉えて成功した。
 農道を車疾走麦の秋 美琴
 麦畑は少なくなつたが、収穫中の麦畑を
 見かけると麦秋と言ふ言葉を思い出す。
 軽貨物自動車之急いで収穫した麦を運ぶ
 他、作業中の人の弁当や間食なども運ぶ。
 疾走の語で農家の生活が見えてくる。

共感一〇句

清水恵山選

里山に夏鶯の声通る 森戸しゆじ
勤行の読経朗々藤の花 石崎そうびん
廃屋を守りし木々の若葉かな 山口美琴
上蔭の生業競ふ家二軒 橋本幹夫
初夏や電子辞書より鳥の声 足立山溪
どの道も今を盛りの花水木 池下よし子
雨のあとつやつやの肌柿若葉 筒井省司
空青し舞ひ立ちさうな山法師 渡辺春生
千年を手繰り寄せたり樟若葉 後藤允孝
わが暮しいよいよ簡素に更衣 山縣伸儀

共感一〇句

橋本幹夫選

まつすぐに生きよと諭す花菖蒲 瀬尾睦夫
夏めきて腰掛石の温みかな 山縣伸義
母の日や亡き母想ふ母ごころ 山口美琴
一房に想ひは長く藤の花 木村宏一
石垣を抱きて躑躅の燃えたぎる 後藤允孝
てらてらの地図を残してなめくぢら 筒井省司
金雀枝の彩も香りも真盛り 清水恵山
酔の匂ふ蔵続きをり夕薄暑 石崎そうびん
初夏や電子辞書より鳥の声 足立山溪
芍薬のかをり満ちたる夜の仏間 池下よし子

共感一〇句

池下よし子選

卯の花のこぼれて白し夜道かな 木村宏一
麦秋やモザイク柄の美濃平野 石崎そうびん
名の知らぬ鳥にゆすらの実を盗られ 石川順一
山川草木雨の八十八夜かな 橋本幹夫
夏木立奥の院へと磴いくつ 足立山溪
農道を車疾走麦の秋 山口美琴
湯上りの赤子に菖蒲香りけり 清水恵山
夏野菜あれやこれやと狭き庭 筒井省司
千年を手繰り寄せたり樟若葉 後藤允孝
一山の石南花浄土明りかな 山縣伸義

共感一〇句

木村宏一選

全山の重みを見せて樟若葉 駒田暉風
国宝の風鐸かすめ夏つばめ 石崎そうびん
せせらぎの堰に遊べる檜落葉 橋本幹夫
颯爽と紺のスーツや若葉光 池下よし子
夏立つや乙女の足の長きこと 山口美琴
ひとしきり舞って燐家へ揚羽蝶 筒井省司
麦秋や富士の裾野の広びろと 渡邊春生
かぶせ茶の新芽摘みたる乙女かな 後藤充孝
一山の石南花浄土明りかな 山縣伸義
庭下駄の泥の乾きや別れ霜 白根鈴音

共感一〇句

山口美琴選

青嵐大樹を揺らし雲までも 木村宏一
卯の花のこぼれて白し夜道かな 同
麦秋やモザイク柄の美濃平野 石崎そうびん
勺薬やむかし小町の薄化粧 橋本幹夫
颯爽と紺のスーツや若葉光 池下よし子
湯上りの赤子に菖蒲香りけり 清水恵山
夏野菜あれやこれやと狭き庭 筒井省司
万緑の空あをあとと鯉跳ねる 渡辺春生
千年を手繰り寄せたり樟若葉 後藤充孝
放水のシユプール描く五月晴 瀬尾睦夫

共感一〇句

後藤允孝選

青嵐大樹を揺らし雲までも 木村宏一
春の雨砂山の色深めたり 石崎そうびん
風立ちて一樹ざわめく椎若葉 橋本幹夫
実桜の社の太き古木かな 足立山溪
颯爽と紺のスーツや若葉光 池下よしこ
芍薬や人知れず咲く真夜の時 山口美琴
緋袴にひらひら舞へる檜落葉 清水恵山
ひとしきり舞つて隣家へ揚羽蝶 筒井省司
万緑の空あをあとと鯉跳ねる 渡辺春生
庭下駄の泥の乾きや別れ霜 白根鈴音

共感一〇句

足立山溪選

無造作に鯉転がす競の市 石崎そうびん
うららかや子供の手品種みえて 同
旧道の軒並み低く菖蒲葺く 清水恵山
宿坊の廊下広々若葉寒 渡邊春生
母の日や宅急便の待たれをり 志村万香
颯爽と紺のスーツや若葉光 池下よし子
軽暖や妻の真白き割烹着 橋本幹夫
全山の重みを見せて樟若葉 駒田暉風
草笛の音色久しき童歌 木村宏一
夏立つや乙女の足の長きこと 山口美琴

共感一〇句

筒井省司選

進水や滑り始めて夏来る 田村公平
一山の石楠花浄土明りかな 山縣伸義
母の日や亡き母想う母ごころ 山口美琴
万緑の空あをあとと鯉跳ねる 渡邊春生
胡瓜植ゑ遠野河童の民話ふと 清水恵山
草笛の音色久しき童歌 木村宏一
白日傘写真の中に若き母 池下よしこ
遠来の客の手土産八女新茶 瀬尾睦夫
芍薬やむかし小町の薄化粧 橋本幹夫
立葵明石の海に顔向けて 志村万香

共感一〇句

山縣伸義選

空爆の窪地は深き木下闇 田村公平
 風音も入れて膨らむ袋掛 同
 軽暖や妻の真白き割烹着 橋本幹夫
 車前草の花に思案の芸術家 同
 座に着きし読経の僧や白重 清水恵山
 米櫃の底に穀象逃げ切れず 同
 病棟に落暉まぶしや夏に入る 足立山溪
 万緑の迫りて峽の流れかな 木村宏一
 花襷の彩り深し薔薇の花 筒井省司
 あめんぼのあめんぼ流の平泳 瀬尾睦夫

共感一〇句

森戸しゆじ選

青嵐大樹を揺らし雲までも 木村宏一
 全山の重みを見せて樟若葉 駒田暉風
 勤行の読経朗々藤の花 石崎そうびん
 やはらかに君眠る夜の椎落葉 橋本幹夫
 夏木立奥の院へと磴いくつ 足立山溪
 旧道の軒並み低く菖蒲茸く 清水恵山
 宿坊の廊下広々若葉寒 渡邊春生
 千年を手繰り寄せたり樟若葉 後藤允孝
 わが暮しいよよ簡素に更衣 山縣伸義
 庭下駄の泥の乾きや別れ霜 白根鈴音

共感一〇句

石川順一選

猫の子のじゃれ合つてゐる麦の秋 瀬尾睦夫
あめんぼのあめんぼ流の平泳 同
葉桜やベンチに憩ふ番鳩 池下よし子
せせらぎに鴉のしぶき薄暑光 同
傘立てに杖の置きある安居寺 清水恵山
新装の人待つ船や夏の湖 同
巡礼の道を外れて残花かな 石崎そうびん
軒下の素振りには止めぬ若葉雨 田村公平
天のもの全て映して植田なり 山口美琴
上簇の生業競ふ家二軒 橋本幹夫

共感一〇句

瀬尾睦夫選

生き餌獲り初夏の網代に鯛巻く 田村公平
観音も御手にふるるや花水木 白根鈴音
千年を手繰り寄せたり樟若葉 後藤允孝
前菜のグリーンサラダや夏近し 池下よし子
一房に想いは長く藤の花 木村宏一
勤行の読経朗々藤の花 石崎そうびん
車椅子やさしく愛でる薔薇一輪 山口美琴
可盃に注がれ往生初鰹 橋本幹夫
豌豆の十個が増えて椀の中 石川順一
ほどほどに衣装道楽更衣 山縣伸義

インターネット俳句 清月
第166号
平成26年5月中の出句から

発行
平成26年 6月20日

主宰 兼 編集
野田ゆたか

発行所
枚方市 大阪清月庵

清月俳句会のホームページ
[https://haiku575.info/seigetukai/
home/homu.htm](https://haiku575.info/seigetukai/home/homu.htm)